

雑 報

埼玉医科大学アレルギーセンター開設のご報告

永田 真

(埼玉医科大学 アレルギーセンター)

近年、アレルギー疾患は増加の一途を辿っています。この領域の疾患にはさまざまな程度と原因アレルゲンによる花粉症から、深刻な食物アレルギーや重症喘息などまでが含まれます。現在、日本人の3～4人にひとりは何らかのアレルギー疾患に悩まされているさえといわれます。そこでアレルギー疾患は“21世紀の国民病”などともいわれることもあるようです。そういったことを反映してか、2009年に行われた第103回の医師国家試験では、この関連の試験問題が10数題も出題されています。

アレルギー疾患の特徴として、ひとりの患者さんがきわめて通常に、アレルギー病態に起因する複数の疾患を合併いたします。たとえばひとりの患者さんが、喘息であり、花粉症であり、アトピー性皮膚炎であり、かつ食物アレルギーをあわせもっていたりすることがしばしば経験されます。アレルギー疾患はまた、体質的なものが基盤にあるためになかなか治癒せず、基本的に生涯にわたって患者さんを苦しめるものでもあります。米国ではアレルギー病態による複数臓器にまたがる疾患を包括的にかつ患者中心的に専門的診療をおこなう「アレルギー科」の研修・診療システムが古くから確立されてきました。一方日本ではアレルギー専門医制度が立ちあがったり、アレルギー科の標榜が認められるようになったのはごく最近のことです。日本アレルギー学会の認定する専門医資格を有する医師は、他学会と比較して、また患者数を想到いたしますときわめて少ない現状です。埼玉医科大学では2005年10月に、大学病院(毛呂山町)に「アレルギー・喘息センター」を開設し、一早くこの領域の専門的診療、また専門医の育成に取り組み始めておりました。すなわちアレルギー性疾患の患者さんのニーズに応えるため、大学病院の呼吸器内科と小児科を基盤に、皮膚科、耳鼻科、眼科が連携して、専門性の高い、そして包括的なアレルギー診療を提供させていただいてまいりました。主な診療範囲は、喘息、慢性咳、食物アレルギー、花粉症、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、アトピー性皮膚炎、じんましん、薬剤アレルギー、昆虫アレルギーなどです。スギ花粉症、アレルギー性喘息に対しての体質改善であり原因治療であるアレル

ゲン免疫療法(減感作療法)や、アナフィラキシーの緊急自己治療薬であるアドレナリン自己注射システム(エピペン)、また歯科治療などでもちいる局所麻酔薬のアレルギー確認テストなどの専門的医療サービスを、適応に応じて提供させていただいております。純粋な皮膚疾患や耳鼻疾患などは、まず、皮膚科、耳鼻科に受診していただくこととなっていました。複数のアレルギー疾患をおもちのケースやアナフィラキシー(食物・薬剤や昆虫などによる急激な過敏反応)の既往のあるかたなど、また喘息や重症花粉症で苦しんでいるかたなどに、ご利用いただいております。

そして2009年4月から、埼玉医科大学は大学の組織としての「アレルギーセンター」を設立いたしました。埼玉医科大学アレルギーセンターは、学内の免疫学教室、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科、呼吸器内科のこの領域関連のスタッフが力を合わせて、アレルギー領域についての医学生や若い医師たちへの教育活動、この領域の最善の治療をふくむ診療活動、そして病態の解明や治療のさらなる発展をめざした研究活動によって、アレルギー疾患に苦しむ患者さんの救済を目指して活動して行く組織であります。以下に、埼玉医科大学アレルギーセンターが活動するうえでの基本方針を列挙させていただきます。

1. アレルギー学の包括的な卒前医学教育体制の構築
2. 臓器横断・包括的で高度な診療能力をもったアレルギー専門医の育成
3. 地域における臨床アレルギーセンターとしての、アレルギー病態に基づく包括的で専門性の高い医療の提供
4. 学内・外での広報・教育活動を通じたアレルギー疾患に対する正しい理解と、evidence-based medicineに基づいた科学的で正しい診療の普及
5. アレルギー疾患の病態・治療の研究の推進

筆者は初代のセンター長を拝命いたしました。副センター長は大学病院耳鼻咽喉科の加瀬教授が就任されました。初代のコアメンバーは大学病院のスタッフにより構築され、この2名のほかに免疫学松下祥教授、皮膚科中村晃一郎教授、眼科森圭介准教授、そしてコアメンバー代行として小児科中野裕史講師が参画

されています。今後は状況により川越キャンパス、日高キャンパス、また保健医療学部におけるそれぞれこの領域の関連教員にもご参画いただくべく、組織を見直してまいりたいと考えております。アレルギーセンターは卒前教育部門、卒後教育部門、臨床部門、研究部門、広報部門によって構成されます。このセンターは誕生したばかりの組織であり、活動を展開し始めるのはまだこれからの段階でございます。行うべきことは無限にあるようにもおもわれます。たとえば科学的

なガイドライン治療を普及させていくことも使命のひとつと考えております。また専門的でかつ包括的なアレルギー診療のできる臨床医を育成してゆくことは当センターの責務であるものと考えます。今後、当センターの成果をふくむ新規情報を、この埼玉医科大学雑誌やまたHPなどを通して、会員のみなさまにもフィードバックさせていただきたいと考えております。埼玉医科大学アレルギーセンターの活動に、何卒宜しくご指導、ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。